

藤田のぼるの

「童話作家のアイウエオ 第2周目」

【ム】村上しいこさん

児童文学の世界にはいくつかの賞があります。ちよっと手前味噌になりますが、この中で「日本児童文学者協会新人賞」は、児童文学の世界に登場した新しい才能を世にアピールするという意味で、かなり大きな意味を果たしてきたと思います。受賞した新人がその後どういふ活躍を見せるかは少し後にならないとわからないわけですが、この賞の第一回は一九五一年で松谷みよ子さん。名称が変わった一九六八年の改めての第一回はあまみきみこさん、第三回が安房直子さん、第四回が斎藤惇夫さん（受賞作は『グリックの冒険』。いずれも同時受賞者あり）というふうにつき、その後の受賞者を見ても、灰谷健次郎、岡田淳、萩原規子、上橋菜穂子、梨木香歩など、その時その時の選考委員がよく見逃さなかったなど、僕自身が関わる団体の賞ながら、ちよっと感心してしまいます。

さて、前置きが長くなっちゃいました。が、そうした中で特に「よくぞ、この人に新人賞を」と思えるのが、二〇〇四年の村上しい

こ『かめきちのおまかせ自由研究』です。あこがれのけいこちゃんとの夢を見ていたところを起こされ、「いつまでねてるんや。夏休みやからいうて、昼までねてるアホがおるか」「宿題はどうしたんや。きょう、自由研究を考える、いうてたやないか」という具合で、いきなりかめきちとかあちゃんのバトルが始まります。とうちゃんの方も、「夏はなんで、暑いのやろ」と聞かれて、「アホ、そんなこともわからんのか。夏もさむかつたら、どっちが夏か冬か、わからんやろ」という具合。これまでの新人賞は、大体高学年向けの「マジメ」な作品がほとんどだっただけに、びつくりした人が多かったようです。

しかし（というべきか）、その後の村上さんの活躍は目覚ましいものがありました。一気にブレイクしたのは、『れいぞうこのなつやすみ』を始めとするお休みシリーズ（？）でしょう。か。奇想天外な展開ですが、読み終わると、「それ、そうやなあ」と関西弁的納得感（？）を覚えずにはいられません。また、『音楽



『かめきちのおまかせ自由研究』
岩崎書店刊
村上しいこ／著 長谷川義史／絵

室の日曜日』などの日曜日シリーズは、子どもたちの空想を刺激してくれる楽しさ、愉快さがあふれています。

そして、更にわたしたちを驚かせたのは、二〇一四年に短距離走に打ち込む中学生を描いた『ダッシュ！』、翌一五年には「うた（短歌）部」に入部した高校生を描いた『うたうとは小さないのちひろいあげ』を出し、YAの分野に活躍の場を広げたことで、まさに「村上しいこ、恐るべし」という感じですが、でも、まずはやはり『かめきちのおまかせ自由研究』の奔放さから味わってみてください。

藤田のぼる（ふじたのぼる）

1950年秋田県生まれ。児童文学評論家・作家。日本児童文学者協会理事長。著書に『児童文学への3つの質問』（てらこや）、『少女少女の作家内日本の文学』（共編、自由国民社）『場所』から読み解く世界児童文学事典』（共編著、原書房）など、創作作品に『山本先生新聞です』（岩崎書店）、『錨を上げて』（文芸堂）『みんなの家出』（福音館書店、2014年度産経児童出版文化賞フジテレビ賞）などがある。小学校国語教科書編集委員なども務める。